

服装の評価におよぼす提示試料の背景、相貌の有無の影響

○田岡洋子* 土井千鶴子** 大林冷子*³ 中川早苗*⁴ 家本 修*⁵ 藤原康晴*⁶

(*京都短大,**姫路短大,³芦屋女子短大,⁴奈良女子大,⁵大阪経済大,⁶鳴門教育大)

目的 服装イメージを測定する場合、服装の提示方法の違いによる影響については、これまで十分な検討が行われてこなかった。本報では着装場面の異なる4種類の服装を選定し、各服装について背景の有無、相貌の有無の状態提示したとき、その服装イメージの評価に違いがあるかどうかを検討した。

方法 服装写真は市販のファッション雑誌から4種類の着装場面(日常着・街着・仕事着・パーティ着)を選定し、各服装に対して背景の有無、相貌の有無の4種類の提示服装を作成した。服装イメージは20個のSD尺度、7段階評定で行い、被験者は近畿地区の4大学317名の女子学生で、1996年9月に実施した。服装イメージを測定した各SD尺度の評定値を従属変数に、服装刺激の2要因(背景・相貌)を独立変数とする分散分析をし、それらの要因の影響を検討した結果などについて、尺度項目別、因子項目別に述べる。

結果 各評定尺度の評定におよぼす服種、背景、相貌の有無の影響を分析した結果、服種1は20項目中、相貌の有無により19項目、背景の有無により10項目に有意差が認められたが、服種全体では相貌より背景の影響が大きいことがわかった。次に20個のSD尺度への反応を因子分析し、第1因子(派手/地味)、第2因子(洗練された/やぼったい)を得た。各因子別に背景、相貌の影響を検討した結果、服種1は背景の有無にかかわらず、相貌のない方が洗練されたイメージ、服種3は相貌の有無にかかわらず、背景のある方が洗練されたイメージになるなど、服種によって影響の仕方が異なることがわかった。このように提示する服装の背景や相貌は服装イメージの評定に影響を与えるため、服装イメージの測定には背景や相貌を省く方がよいことがわかった。